

編集後記

同窓会誌第6号をお届けします。新型コロナは3年目を迎えました。2年もすれば収まるだろうと高をくくっていましたが、収束の兆しはまだ見えていません。高をくくっていたのは私だけでなく、世界中の多くの人がそう思っていたのではないのでしょうか。ワクチンは昨年には接種が始まり、私自身は4回目の接種を先日終わりました。4回目の接種を受けることになるとは思いませんでした。今は日本でも第7波の感染拡大の中にあり、少し前までは連日のように新規感染者の最多更新が報道されていました。軽症者が多いとはいえ、まだまだ油断はできません。一日の感染者が20万人を超える事態が日本で起こるなど、誰が想像し得たでしょう。そんなコロナの中で、同窓会誌の原稿を集めるのもままならないものがありました。今回は森重文さんや望月拓郎さんの記事の転載を行いました。今回も記事が集めにくい状況です。皆さんからの投稿をお待ちしています。

さて、2022年は新型コロナが収まり切らない中で始まりましたが、2月24日にロシアがウクライナに侵攻するというとんでもないことが起こりました。それまでに不穏な空気は感じられましたが、まさかロシアがウクライナに攻め込むことはないだろうとほとんどの人が思っていたと思います。そのまさかが起こってしまいました。今の時代に、そんなことが起こると誰が予想したでしょう。まさか、と思っていることが起こりえる時代なのです。そして7月7日にイギリスのジョンソン首相の辞職がありました。新型コロナの対応で、しばしばニュースにも出てきていた、ちょっと型破りな首相でした。そのニュースにビックリした翌日7月8日に、今度は安倍元首相が銃撃されるというニュースが流れました。日本の元首相が殺されるなど、そんなことがこの日本で起きるなど、思っても見なかったことです。今という世界は、そんなのありえないということが起こってしまう混沌とした時代のように感じられます。

荘子にこんな話があります。

渾沌という帝が支配する国があった。南海の帝のシユクと、北海の帝のコツがその国を訪れ、歓待をうけた。二人はその恩に報いることを考えた。渾沌には、目も耳も口も鼻もない。そこで二人は、美しい色を視、妙なる音を聴き、美味しい物を食べ、安らかに呼吸ができるよう、穴を穿つことにした。一日に一穴を穿ち、七日目に七つの穴が出来上がったとき、渾沌は死んでしまった(七日而渾沌死)。

荘子の話は寓話が多く、押しなべてとらえどころがありません。何とでも解釈できます。この話も鼻をつままれたような感じですが、渾沌とは混沌であり、形のない無秩序の世界なのですが、混沌は混沌のまま受け入れるしかない、と言っているように思えます。今の世界も、思いもしないことが次々と起こり、混沌とした様相なのですが、それと何とか折り合いを付けて行くしか道はないのかもしれない。一日も早く、平和な世界が実現できることを祈らずにはられません。

(編集長 重川 一郎)